

<分担研究報告>

学習障害に関する研究

分担研究者 竹下 研三

要約：学習障害の概念について歴史的考察がされた。学習障害には広汎性発達障害に類似する一群の存在が強調された。神経生理学的研究で、事象関連電位 p300や Miss match negativityの異常が確認され、Gordon Diagnostic System が注意欠陥の検査に有用であった。3歳児健診の発達リスク児の予後は正常になった群と学習障害になった群があり、両者の3歳での内容に差がみられなかった。学習障害の発見には3つのルートがあり、指導では社会的未熟への指導が重要であった。

見出し語：学習障害、言語発達遅滞、広汎性発達障害、3歳児健診、注意欠陥、多動、

事象関連電位、P300、Miss match negativity、Gordon Diagnostic System

【目的】学習障害は学習行動上に現れるひとつの異常な現象であり、脳の障害によって成立しているとされる。しかし、精神遅滞や自閉症ではない。本研究班の目的は、このあいまいな診断基準を現実 に即してより明確にし、その中枢機能障害の特徴と検査手法を明らかにし、その対策（介入）は どうすればよいかを明らかにすることである。

【計画・経過】小児科医、小児神経科医、児童精神科医、教育心理、スピーチセラピスト、療育指導医師からなる研究構成で、随時、構成メンバー以外の専門家の参加を求め意見を聞きながら研究を進めた。成果は第1回班会議（平成7年1月13日）と松井班全体会議（平成7年2月23日）でまとめた。

【結果】以下、研究協力者の研究成果をまとめる。

(1)竹下は、学習障害の概念を歴史的に考察した。これは1966年の微細脳機能障害 Minimal Brain Dysfunctionに遡る。しかし、Kirk Sによって指導された学習障害児団体は政治的に公法を成立させ施策を優先させた。これは学習障害の概念を曖昧なままにした。一方、情報処理過程の異常とする心理学的考えは今日の高次機能の研究で解明された内容とかならずしも一致をみていない。

(2)栗田は、全米学習障害合同委員会で示された概念に含まれない異常行動として広汎性発達障害に近いグループの存在することを示唆した。彼らの行動は自閉的であっても、自閉症のそれほど完成されたものではなく、Asperger症候群のそれに類

鳥取大学医学部脳神経小児科

Division of Child Neurology, Tottori University Faculty of Medicine.

似するものであった。

(2)加我・宮尾は神経生理学的手法をとり学習障害の異常を客観的に把握する方法を明らかにした。方法は事象関連電位を応用した研究で、視覚認知で P300、聴覚認知で miss-match negativityの成果が報告された。学習障害の内容との関連性が今後さらに研究される。

(3)関・橋本は、多動に対してGordon Diagnostic Systemの適応性を検討し、この有効性を証明した。

(4)小枝と大石は、幼児の発達過程から追跡し学習障害との関係を研究した。小枝は3歳児健診で疑った学習障害リスク児をフォローした。正常化する児と学習障害児になった児の3歳での鑑別は困難であった。大石は、学習障害が発見されていく流れに、幼児健診から、就学前の療育相談から、入学後の3つの流れのあることを明らかにした。早期発見と有効指導のためにはこの流れをシステム化させることが重要だと報告した。

(5)加藤は、学童期の学習障害に対応した経験から、彼らの指導には学習上の問題だけでなく、未熟な社会性への指導も重要であると報告した。

(6)前川は、各種心理テストの間の相互性について比較検討した。

【リサーチ・クエスチョンと回答】

(1)学習障害の診断基準はいかなるものか

(回答) ICD-10、DSM-IV、全米学習障害合同委員会などで定義されている基準が基本になるが、ここで共通する概念をそのまま使用するのはわが国の文化的、教育的実状にそぐわない面がある。周辺領域の問題行動を含めたわが国で有用な概念を3年目にまとめたい。

(2)学習障害は中枢性の障害によるものか

(回答) 学習障害の概念で共通する認識は、発達性の異常であり、中枢性の異常である。かつ、知能が正常である点を特徴とする。この研究班はこの異常を神経生理学的手法により明らかにした。認知機構のプロセスに問題をもつ児と多動など行動自制に問題を持つ児とでその病態把握に有用な神経生理学的検査法を3年度に明らかにする。

(3)学習障害に対する介入効果はあるものか

(回答) 介入には、就学前の介入と在学中の介入がある。前者は乳幼児健診でのリスク因子を明らかにし、さらに彼らの指導システムを明確化することである。後者はより広がっている問題への指導指針を確立することである。

【今後の課題】

(1)学習障害の概念について教育、医学、外国の各専門家とでディスカッションし、日本での考え方をまとめる機会を作る必要がある。現在、仮称：学習障害国際シンポジウムの開催を計画中である。

(2)狭義の学習障害と広義の学習障害についてわが国で使用されやすい概念をまとめる必要がある。

(3)学習障害の病態を、神経心理学的手法と神経生理学的手法の両者で示される特性を併合させたアセスメントシステムを作る必要がある。

(4)介入効果を確実にするためには、早期発見のためのシステム作りと、聴覚型、視覚型、注意欠陥多動型、広汎性発達障害型などタイプ別に把握し指導・対応する方策をまとめる必要がある。

(5)学習障害の中に細胞・分子遺伝学的な側面がないかどうかを検討する必要がある。

(6)教育上での受け皿はどうするのかについてリコメンドする必要がある。外国にはリソースルームがあるが、わが国にはこのような受け皿はない。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:学習障害の概念について歴史的考察がされた。学習障害には広汎性発達障害に類似する一群の存在が強調された。神経生理学的研究で、事象関連電位 p300 や Miss match negativity の異常が確認され、Gordon Diagnostic System が注意欠陥の検査に有用であった。3歳児健診の発達リスク児の予後は正常になった群と学習障害になった群があり、両者の3歳での内容に差がみられなかった。学習障害の発見には3つのルートがあり、指導では社会的未熟への指導が重要であった。